

224
L
13

Handwritten text in a vertical rectangular box, possibly a signature or name.



53

明治三十二年四月

家松園の秋家

従六位藤原の陸王

は



かまもくもまたみなくしてみは月の半にかれし
姫 内りの花 刀自は長門なる萩の生れにしてその
心 心まじりしきか中につま琴のやさしき縁を

もこのめ玉ひき伴ぬしにとつき玉ひしよりは、その夫
君の爲には、我が身をわすれてつかへ玉ひ、又み國の
ためにも、みこころさし、淺からさりしとそ。そは、征清
の戦ひおこりしとき、直に赤十字社に入て、つくさ
れたる真こころ、又大日本女學會の會員ともなりて、
同じ志の人々をいさなひ玉ひしなどにて、も、しるか

りけり。かくよろつに、みこころをくはり玉ふなかに、
わきて我かしきしまの道は、みつからも好み玉へれ
と、ひとつには、その夫君の品行、交際などの高尚なら
む事を、思ひをかりて、ともごとく學びたのしひ玉へる
よしを、をりにふれて、刀自のかたり玉ひき。

かくれさせ玉ふまへのとしの秋なりけむ、翠松園の
社中うちかたらひて、伊勢と尾張の社友を、左右に別
ち、歌むすひし玉ひし事ありしに、その頃刀自は、は
とところのをやみに、いたくやせさらほひ、冬かれの
柳の茶のやうにて、おはしなから、猶とこのうへにて、

人々と共に歌を案し玉ひ、終に全勝を得て、いとこ
よろこはれけるとか、聞侍りしか、いくほともなく、眼
をやみ玉ひ、やうくほかのいたつきもをはりて、お
もきをやみに、年をこえ再ひ、かへらぬくにうつり
ましぬれば、やかて此歌結ひそ、此世の花の咲きおさ
めなりける、と今更おもひうかはれて、いたみまゐら
するも、かなしききはみにこそ、とし七月の、一周忌
の追悼に、刀自のとしころ、よみ出られし言の葉と、親
しき友とちかよせられたる、かなしひの歌ともをど
り重ねてすり巻となし、そのひとこにわかたは、せ

めてもなきたまの、なくさめ草とも、なりなむとて、夫
君のおほしたくせ給ひ、師の君にこひて、えらひ定め
させ給ひ、そか巻の名も、姫ゆりと名つけ給ひぬ、さる
にわらはにも、その巻のはしに、何まれひとこと書そ
へよといひこし給へり。もとより刀自とは、久しき友
とにはあらねど、いかなる縁のありけむ、只一度たい
めまゐらせてより、いとしたしうしたまひ、ことばを
とつ年の秋、わかこものゝ山にかへるを、いたく別れ
を惜み給ひて、強てもとくめられつるか、それやかて、
をはりのわかれとなりつるあと、そのをりふしのみ

ありさま、今も猶わすれかたう、身にしゝ侍れは、はし
書あといふものは、いかやうにかくへきものともし
り侍らぬを、いなまもやうて、かくものしつるも、かこ
る情のありてなりけり、いとをこあるしれわさあか
ら、見む人、文のつたあきをすて、その情のあはれあ
るはかりを、とらせ給ひてよ、と冬華庵のをふね、つこ
しみてまうすあふかしこや

明治三十五年といふとしの夏のはしめつかた

正月 兎 月 望

新年の歌

としの立けるあした

松竹とまつさかつきのうちにみて年のはじめと祝ふけふかな

としほきの人とむかへて

かねてしる人めつらしく思ふ歳今朝あらたまの年のほかひに

もちひいはふとて

新としにもちひいはひていはけなきときな心に成にけるかな

若水

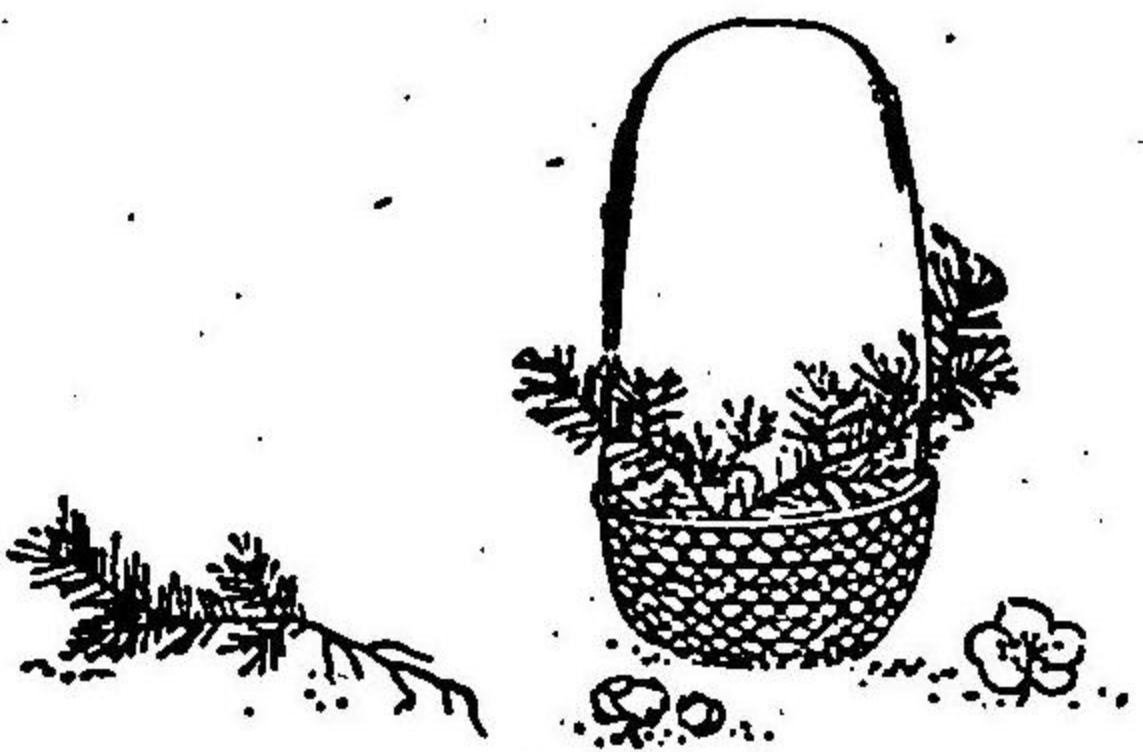
車井のなはくる音ものとかにて家毎にくめる今朝のわかみつ

門松はるのとし

かと松にうへたる梅の花みればまことの春のこゝちこそすれ

新年山

大みよのすかたに似たるふしのねと先新年にあふきみるかな
めにまれし山またやまもたち歸るとしの始はあらたなりけり



春の歌

若菜

たらちねにすゝめんほとは片とかの雪まの若を尋ね得にけり

瑳若菜

摘ためむぬのもかたまも持ぬかな瑳のわかをみいてたれとも

月前梅

木かくれの梅のはなさへ見ににけり月の光はおほろなれとも

行路梅

こゝろなく過つるみちに梅の花ありとしらせてにほふ風かな

田家梅

賤かすむ小田のかきつのうめの花ひと枝こひて家つとにせむ

雨後霞

さよかにのいとにも似たる春雨のなごりの露に霞むうらかな
はれゆきし雨の名こりとわか草の上にとどめて立かすみかな

子日松といへる酒のいはひに

君か家とめぐりくし小松原我かものにして子の日するらむ

柳のめぐむと見て

日あたりのよき我かやとの糸柳先みなみよりめぐみろめてき

柳先花緑

我かやとの花まつ垣ね青柳のみとりよりころめにかよりけれ

春雪

おもしろく降つもりたるあわ雪ものきのしつくと成にける哉

いかのほりとみて

いかのほりのほりくてあけまきの心も空になりやはてけむ

朝春雨

竹むらのねくらはなると村鳥のはおとしめりてはる雨うふる

庭春雨

ひろ庭のやなまきけふりて降雨にしめるまさこのいろの長閑さ

胡蝶

ひらくと散くる花にむつれつと木かけはなれぬ蝶も有けり

故郷

ふるさとの庭のすみれの花摘てとさなころにかへるけふ哉

おほろ夜に蛙のなくとまよて

明日ふらむ雨しりかほに馳なる月の夜すからかはつなくなり

花

さまくにはなはあれとも皇國人櫻とおきてなにとめつへき

初花

きのふまたまたしとおもひし一本の花はまはらに咲初にけり

静見花

人みなのかへりはてたる夕まくれ心しつけくはなとみるかな

夕花

入相の鐘きこなからあくかれてなほさりかたき花のしたかけ

松間花

あらし山ふもとのまつのひま毎に咲ふさきたる花のいろかな

落花埋庭

すかのねのなかきひねもす散花に庭のこけさへ見はす成ぬる

春旅

うらくとくかすむ行てにあくかれて旅ともしらぬ春のたひ哉

紫人のつゝしかさしたるかたに

みやまちにさけるつゝしと折うへて夕くれなるに歸る紫ひと

款冬

ひとへなるかきとへたてうるはしく八重山吹の花咲にけり

雨中款冬

春雨のけふるはかりのしづくにもなひきふしたる山吹のはな

苗代

種まきていく日もあらぬに山かけのと田の苗代色あともたり

暮春雨

花ちりしわか葉のすゑに露見はて軒はしつかにはる雨うふる

暮春鶯

くれてゆくはるとしとや鶯の若葉かくれになきくらすらむ



夏の歌

更衣

夏くればきなれ衣とぬきかへてひとへに春のとしまるゝかな
かろけにもみけて涼しく思ふかなきのふかへたるひとへ衣は

残花

ものみなにおくれかちなる山里にならひて残る花もありけり

山残花

しけりあふやまふところにもけ入は青葉まじりに花も残れる

首夏月

夏きぬといへと日かすの浅ければ月のひかりもおほる成けり

朝野公

朝またきひと齋もらすほととぎすのこれる月に行へとはとや

楓のわか葉と見て

わか葉より秋とちきりて見るものはあらしたかとの楓成けり

雨中新竹

風にたれたへぬ今年の若竹のかへるひまなくろくあめかな

夏草

夏くさのしけりくて我か門のとかはも見にすなりにける哉

蚊遣火

ゆふかほの花もけふりにうまるまで賤か軒はにかやりたく也
かきこしにけふりなひきぬさしなみの隣の軒も蚊遣たくらむ

海邊に夕立のするとみて

ぬれしとてさわく小舟に吹とまのしゆりもあへすはるゝ夕立

速夕立

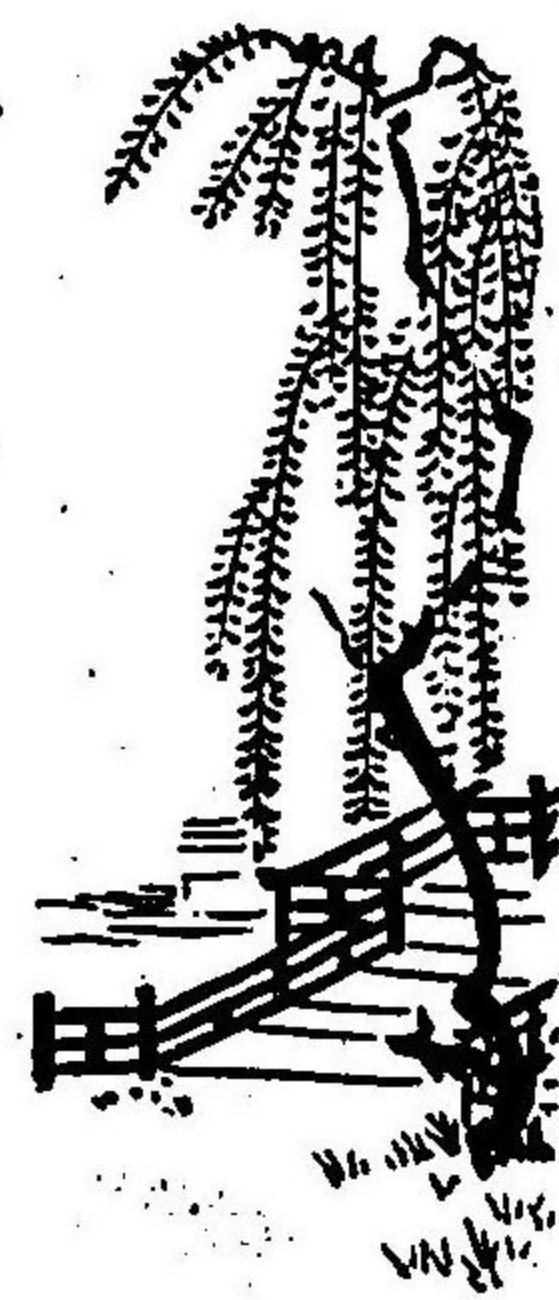
なる神のおともとゝろにとちかたの峰かきくらし夕立ちふる

夕顔

蚊やりたくけふりうすれて賤かやの垣ね涼しきゆふ顔のはな
ゆきかひのひとのみるまで我やとの軒はに咲ける夕顔のはな

川納涼

ゆく水に月もすみたの河つゝみつたふもすゝし夏のゆふくれ



秋の歌

野外虫

月見むとあくかるゝ野へにこゝかしこ我と誇ふ虫のこゝ

深夜にむじとさきて

秋の夜のふけゆくまゝになく虫の聲かきりなく成にけるかな

行路萩

道はたのすゝまましりの萩の花折ころつくせさきあへぬまに
行かひの絶しとかへの萩の花道なまきてにみたれあひにけり

行路薄

尋ぬへき人なきのへにまよふ日はまねく薄もうれしかりけり
糸薄さまねく野すゑの細道とこゝろほろくもたとるけふかな

朝かほの花あまた咲たるころ

さま／＼の色とかすへてわれひとり見るにはとしき朝顔の花
親しき友に朝貝の花見にきませといひ違けるつき手に

へたてなき哉か友かきに見せて後しなされためせむ朝かほの花
おくれなはしほみはてなむとくきませ露うるはしき朝顔の花

霧中鹿

山の端はたちかくせともさと鹿の聲のみ霧もうつまさりけり

深夜鹿

鳴鹿の聲はふもとに成にけりこよひもいたくふけやしぬらむ

夜鹿

打よする涙はひかたにしつまりていろやまつたひとしき鳴也
さとしかの鳴ねなからにおろす也たかねはるけき夜半の山風

曉鹿

月もはやいるさの山のあけかたにつまとひかねてと鹿なく也

仲秋月

くまもなき秋のも中の月影にむかふこよひはもの思ひもなし

海邊月

あまと舟こき行みればさやかなる月の影どものせてけるかな
風たえてかゝみに似たる海原のろこよりいつる月のさやけさ
くろふねのけふりろくまとなりにける沖にほのめく月の光に

閑居月

かけあかつ隣なればおのつから月もこゝにやすみ渡るらむ

朝霧

この朝け霧立こめてさしなみのとなりも見にす成にけるかな

山路霧深

こゝて行道のしどりのやま松もたちかくしけりけさの秋まり
田上雁

夕日かけ残るたかねととひこえて田のものに落るかりのいつら
山家禱衣

うちしきるさぬたの音に山彦のこたへてゆめとさましつる哉
遠郡禱衣

稻からぬととめなるらし山本の里に日ねもすころもうつなり
夕鶉

山のはに夕日のかけは入はてゝ野末さひしくうつらなくなり
初紅葉

夕つく日てりてめにつくうす紅葉時雨や早くかゝりうめけむ
まのふまてめにつかさりし紅葉はとかつゝ見する夕日影哉

雨後紅葉

村しくれはれたるのちに行てみん外山のもみちいかに染らむ
ひとしきりふりてすきゆく雨の露上葉にみせてちる紅葉かを
上葉にはしくれの露の見へなから夕日のかけにてるもみち哉

松間紅葉

こくうすく染し紅葉の匂ひよりかはらぬ松もはにはありけり
色かへぬ松にもしはし色うへて夕日にてらすつたのもみちは
紅葉有遅速

もみちして色とまうへる山かけにまた染あへぬつたも有けり
庭紅葉

朝きよめきよめもあへす二つ三つはやくも落る庭のもみちは

雨中紅葉

いひしらぬ色に出にけりこの朝け時雨にぬると庭のみちは
手向山にまうて

ひろ前のもみちならねとひとみなのおかき心と手向てうゆく
秋 山

うなぬらのとらはとひとりおもふか推のみ落る秋のやま越
秋 夕

さむしさにしはのといてなかわれは衰いやます秋のゆふ暮
秋 旅

まかなちの旅ちならすは遠近の紅葉かりしてゆかまじものと
さむしさにしらぬ人さへなつかしと思ふは秋のたひち成けり

冬 歌

初 冬 霜

おほねひくはたのなかみち冬かれてあさなあさを結ふ霜哉

社 頭 霜

あかつきにまうてしひとのあとみよて置霜しろき神のひろ前

行 路 霜

うすれゆく月のかけかと思ふまで門のおほちに霜うおさける

江 寒 蘆

かれあしのさやく音さへ身にしみて入江寒けくこからしの吹

時 雨

山のはれ夕日のかけはみよなからふもとの里は時雨ふるなり

夕 時 雨

木の葉みなちりての後の村時雨何とかうむるころなるらむ
かきくらし夕日もみよすなりはてとくらき庭に降る時雨哉
夕月のかけもうすれて山本のさとのあたりはしくれふるなり

海邊時雨

島やまにいろひのかけは見になから浦わつたひて時雨ふる也

夜落葉

夜嵐のすさはぬまにもたゆみなく落る木の葉の音のさひしき

山家落葉

山すみもうつむはかりにつもりたる木の葉は風を吹清めける

故郷落葉

住すてゝかへりみもせぬ故郷の庭は木の葉やうつみはてけむ

師の君のやとり給へりし冬のあしためつらしくも

うくひすのなきければ

師のさみのあさいのゆめとやふりてもさかさまほしき鶯の聲

夕木枯

夕月のにほへるかけも身にしみてまときすはかり木枯のふく

雲

いらこ崎しほかせさふくふきこしてあこきか浦にみろれ降也

深夜霞

さ夜ふけてゆめもむすはぬ老か身とおとろかすまで降る霞哉

あられのふりける夜まろふとあり

まれひとの火桶いかにと思ふ哉ふる音たかきのきのあられに

風いとさむかりけるあした

おく霜とはらひかほにはすさめとも風にもかるゝ池のあし村

枯野

かれてふすのへの草はにしのふ哉虫のねきとし秋のあはれと
とりにふれて

さは渡るあらしにたへぬ此ゆふへこゑ寒けにもさよき鳴なり
初雪

木つたはよこよろしてましむら雀こすゑにつもる初雪の上と
吹風の身にはしめともはしめしてみはやと思ふけさのはつ雪

雪中鳥

竹も木もみなから雪にうつもれてやとりわつらふ村すゑめ哉

雪中竹

しくれてはさらにふりつむ白雪とたわよなからにたふる竹哉

雪の降ける日人々つとひてかたらふとりから

ふりつもる雪はとけねと打とけてかたりふかしぬたま合の友

磯千鳥

くろ舟のけふりちかよるいろ崎のこなたの松に千鳥なくなり
うちよせし磯のもくすのひまとめてあさる千鳥の脣の寒けさ

歳暮雪

新としとむかへむための門松にゆきのしらゆふかけてける哉

雑の歌

松影映水

池のおもにあふれて映る松影は水うこせはまこちこちすれ
青ふちのうこにみとりと重ねけりしけれる松の影のうつりて
峰松

ぬけいてし高ねの松は大うらの雪とつらぬくこちこちすれ
海邊松

すみのくのさしうつ浪もしつかにて千世の色うふ松のむら立
松上鶴

朝日子のとよさかのほるやま松の上よりおろすあしたつの聲
山家雪

山すみの軒にたよふむら雲とけふりなりとや人のみるらむ



雨 後 雲

舟も木もあめのなこりの露みはてうらおもしろき雲ろ残れる
船 路

はてもなき大海原にふなてして雲ぬとわたるこゝちこすれ
扁舟暮歸

夕まくれろのおとたかく聞ゆ也いつこに歸るとふねなるらむ
谷 古 橋

まろ木ともわかぬはかりにこけむして渡りわつらふ谷の古橋
閑 居 友

世と捨し我が庵りにもとりくはむかしの友の尋ねきにけり
述 懐

いたつらにすきし我が身の怠りとくひてかへらぬ月日成けり

山家述懐

世といとふ心はさらになけれともすみよかりけり山蔭のいほ
寄梅懐舊

梅か香もいよく高く成にけりきみかめてに昔ししのひて
東宮の御成婚とほき奉りて

千よろつのかきりもしらす大内の山にねさせる松のふた木は
征清のいくさありけるころ

外國に出たてたかふものふと思へは夜半もねられさりけり
何かしの家において七福神の畫によみあはせたる

うつしゑのなまつの神の成はひに習はと誰かさちなかるへき
師の君か征清のいさとに敷四等旭日章たまはらせ

給ひてほき事ありけるとき

さしのほる朝日のかげといきとしと松の林のうへに見るかな

病いよて後師の君と迎へまつれるうれしきに

いたつきのふすまはなれて師の君と向ふるまてに成し嬉しき

とりにふれて

朝ほらけかみの御まへにぬかつきし心とつねのことろとも哉

紫式部

むらさきのにほひゆかしき君か名は幾世の後の人もめつらむ

寄山祝

山のかすひとつにつみて大君の高きめぐみのしとりにやせむ

大御世のつきぬみいつは高ちほの高ねよりこころ遷やきにけれ

○明治三十四年といふとしの十一月十六日四日市

松風會の催したる故ゆり子刀自追悼正式會の歌

兼題 冬懷舊

發 齋 從六位 藤原朝臣陸夫 名古屋

ひめゆりの霜にかれふすあと訪ひてたすむ袖にふる時雨哉

從六位 物部宿禰精一 四日市

窓たよく時雨にゆめとやふられて君かむかしとしのふ夜半哉

正七位 大伴連政埤 同

冬かれて散る木の葉にもしのはれて乗のかゝる松のしたかけ

醫學士 今井蔭通

おく霜にふゆかれしらぬ松風のおところ君かかたみなりけれ

讀師代客員 たちはなの大和 名古屋

来てみれば霜かれはてゝ影もなしゆかしかりつる姫ゆりの花

源朝臣惠之 四日市

なき君とめてしもみちは散はてゝ只袖ぬらすむらしくれかな

講 頌 たちはなのしか子 名古屋

くきやせしきゆりは霜にかれはてゝ吹音さむしなこの松かせ

同 客員 藤はらのさと子 同

君しのふなみたのみかは大空もしくれく〜てくれわたるらむ

源朝臣正祐 四日市

花もみち共にかたりし君ゆきてひとりしくるゝ夜半の淋しさ

藤原朝臣徳之 同

冬の夜のなかきにつれて思ふかなゆきてかへらぬきみか昔と

藤原朝臣清澄 同

すこやかにまじゝむかしう忍はるゝ時雨降日も木の葉散夜も

沙門淡月 四日市

枯はてしくさふと見ても忍ふかなにほひあふれし園の姫ゆり

藤原朝臣守善 同

あらはなる梢にかゝる村しくれ我かたもととも濡してうゆく

藤原朝臣友宣 同

冬かれのこすゑと見ても忍はれて音のひとのあとともしろ思ふ

源朝臣吉三 同

降つもる雪見る毎にしのかを君とあろひしころのふること

講師客員 藤はらの孝子 名古屋

もみち葉もみなちりはてゝ木枯のさむき夕にきみしのふかな

○各地の松風會員よりよせられたる歌

從五位 鴻巣盛雄 沖繩

歸り來ぬ人いかならむ冬もなほなみのうきめは枯のこりつゝ

正六位 大藏將英 津

埋火とかきとこしつゝ語る夜は君としのはぬことゝてもなし

從六位 松原久之 大垣

とみなめし早くしほれて影もなしこのころ霜はかき初にしと

從六位 大饗大英 名古屋

冬かれの草木はもはむ春もあるに根絶はてたるゆりの一もと

從六位 横尾炳 延岡

霜といたみとしのはねさる音寒しひとりある君やいかに聞蘭

正七位 山田龍二 下野佐野

はれやらぬ思ひの雲の重なりてろくしくれにぬるゝ袖かな

藤井守義 津

ありし世と忍ふたもとの泣ころ空にしられぬしくれなりけり

山際近訓 津

高殿のとすとかゝけて雪見せしむかしの冬うこひしかりける

渡邊千船 東京

木枯の身にしむなへにもみち葉と散にしきみとおもふ夜半かな

福田遠 松坂

稀りこぬろの面影のしのはれて冬のひと夜とあかしけるかな

恒川重光 津

なき君と忍ふあしたの木枯は身とさるはかりかなしかりけり

藤田英興 名古屋

はかなくも消てあとなき人の上とさなからみする庭の朝しも

岩間正之 海東正則

木枯の音きくたひになき人のたまのゆくへのしのはるとかな

沙門橋外 呼叔

なき君とねさめて忍ぶ窓のとおとつれてふる玉あられかな

沙門専乘 周防山口

千世ふへき園生の松にふりつみし雪もはかなく消にけるかな

沙門賢孝 野岡

冬の夜のねさめの袖もぬると哉かへらぬ君とおもひしくれて

沙門繼述 名古屋

なき人としのひ忍ひしけふもまた時雨かちなる冬の夜半かな

河合好治 豊橋

我友のむかし忍ひて冬までものこれるむしのねにやなくらん

高田顯允 兼野

松かけに匂ひて咲しとみなへし枯てはかなくなれるふゆかな

堀田篤之 津島

千とせもと忍ひし松の下かけに雪ときぬにしきみいかにせむ

加藤昌義 法目寺

松風のたかき園ふのとしへ草しもかれはてしきみうかなしき

伊藤松男 四日市

木枯のおとにも君と思ひいてとしくれに袖のぬれぬ日るなき

冬枯はまたこん春もあるものど行てかへらぬ君としろおもふ

白雪のつもるにつけて忍ぶ哉ともになかめしきみのむかしと

婦人の部

男爵夫人 大島初子 名古屋

なき君のうへと思へはかのつから袖にをみたのしくれ降なり

山口光子 前橋

いにしへと忍びてしめる我か袖に一むら時雨ふりかよりつゝ

黒川千春 廣島

松かけの一本きゆりしもかれて見し世にも似ぬ此まゝとゐかを

鈴木小舟 東京

神無月しくるふららのうす月夜うつるもかなし君かおもかけ

大野信子 津

去年の冬山田のさとの物かたりこれ限りともおもはさりしと

大野悠子 大阪

伊勢の海なきさにあろふ村千鳥君と八ちよとよひにしものと

松井武子 東京

姫百合の花のすかたのあともなく冬枯さむきませのうちかな

松原順子 大垣

さまざまに思ひつらねて忍ぶ哉ゆきのあしたも時雨ふる夜も

野田俊子 札幌

匂ひてし言葉の花もふゆかれてこからし寒きまつのはたかけ

大海原秀子 大阪

としへ草ともに摘にし君まさて霜夜身にしむろのふまつかせ

松宮鐘子 名古屋

友とせし園ふの松のひと枝とあはれとりにしこからしのかせ

東條花子 四條

人の身の上はかななき百とせとちきりし君もゆきときよにつゝ

幡野澄子 名古屋

空さへもおなし心にしくるらんなき友しのふふゆの夜すから

豊岡恒子 東京

窓とうつあられの音のさひしさに音のともなつかしきかな

讚井龜子 山口

なき君と火桶かこみてむつひあびし音の冬としのふけふかな

山審審子 津

霜かれの垣根にのこるしら菊は君のかたみときくろかなしき

藤田房子 敦賀

木枯にちりてあとなき紅葉にもあかなきともとおもふころ哉

湯淺さく子 津

取いたす綿いれころもうらみてもかへらぬ昔こひしかりけり

三澤照子 敦賀

はらくと木の葉亂れてなき友のむかしと忍ぶ冬のゆふくれ
もみち葉も軒はにちりて忍ぶ哉我かたもとよりまつ時雨つゝ

花房貞子 東京

君しのふことしの冬の松かせはひとしほ寒きこころすれ
なき君の忍はれてころ悲しけれ落葉のおとときくにつけても

今井孝子 津

姫ゆりのちりにしあとの忍はれてたとる山路に時雨ふるなり

久保真砂 津

なき君となれもしふるか冬の夜の空もしくれて晴くもりつゝ

福鑑恒子 名古屋

君か鳥つゆもあわぬ袖の上といかにせよとかしくれ降らん

松本静子 札幌

木枯のふくにつけても忍ぶかなもろくも散りし君かゆくへと

安藤みつせ 伊賀上野

なき人と忍ぶとりしも村しくれふるはなみたとさうふ成らん

森 策子 津井

ありし世と忍ぶたもととしほれとや又一しきりしくれ降さぬ

山際常子 津

こすゑふく夜はの嵐にさうはれて君はいつくへかしま立せし

川喜多琴子 津

雲ふかく入にし月はかけもなくうらにむなしきこからしの脣

直村長子 津

君のいますおくつき所もさよてあわれ身にしむ冬の夜の月

龜井愈子 津

大空のしらぬしくれに袖ぬらす寐覺のところにまつかせうぶく

加藤せい子 明石

木枯のわたるこすゑとなかめつくなき人忍ぶまとのうちかを

田中房子 東京

過しとじともに聞にし松風もいまはむかしとなりけるかな

坂崎禮子 津島

木枯のこゑにたてよもなき人と忍ぶとりしもふるしくれかな

水野ひさの 津島

たままつるたよりと共に音つれてしくれかなしき冬は來に魁

石川かき子 台北

雪の日もいとほす共にゆきかひて學びしむかし戀しかりけり

葦原福子 津

松の園に君かのこしよことの葉はふく木枯もはらひかねつゝ

○刀自の交りあつかりし會員外の人々より
よせられたる本會無題の歌

從五位 小島政憲 名古屋

一たひは露にたへにし姫百合も冬かれはてゝかけたにもなし

從六位 板垣義成 山口

松風のさうふしくれのおとつれとまぐにつけてもぬるゝ袖哉

滋岡從長 大阪

安濃の浦にみしや昔の月かけとしのふるうらにふる時雨かな

曾根俊吉 豊後豆田

花と見し君はいまきてわれのみは雪といたゞく身と成にけり

岡 吉胤 水戸

冬枯のこすゑとみるもかなしきにあはれとらふる松風のおと

片岡 實 名古屋

降雪とみるにつけてもあともなく消しむかしの忍はるとかな

加藤昌年 名古屋

つくくゝと昔とおもふ夕暮のうらかまきくれてふるしくれかな

青木兵二 熱田

大ららの月もかくろひかなしきに時雨のあめう音つれにける

滋岡八千子 大・阪

ありし世の昔と思ひかこすかな寒さあま夜のうつみ火のもと

婦人國風社 森本つゐ子 東京

言の葉とふみのはやしにとゝめ置てはかなく霧と消し君かも

同 加藤もと子 名古屋

世にまさは共に見ましと初雪のあたらしきも甲斐なかり見

婦人國風社 平野不二子 桑名

冬枯のあさちかはらとなかめつと世になき君と忍ふけふかな

同 平野都年子 桑名

木枯にたとはなれて散る紅葉みるにつけても君うかなしき

○當座探題式の歌

曉 紅葉 讀師 やまと

朝日かけまたさしいてぬ東雲のくもまにてるや紅葉なるらむ

朝 紅葉 しか子

朝露にぬれてかつちるもみち葉と見るにつけても君と社思へ

夕 紅葉 精一

暮わたるふもとの里に立つ霧のたにまに匂ふみねのもみち葉

尋 紅葉 蔭通

色こきは移ろひぬらし下かけのまた添あへぬもみちたつねむ

紅 葉 淺 友宣

尋ねいる山もころもふかけれとまた色うすき峰のもみち葉

隣 紅葉 政輝

我が物にやかて成なむのひ出しとなりのかきの蔭のもみち葉

田家紅葉 さと子

かくてほす野中のいはの生かきに錦かけたるはしもみちかな

山家紅葉 正祐

吹きおろす峯のあらしに誘はれてちるも寒けし軒のもみち葉

野 紅葉 徳之

夕日かけ残るすうのよもみちはの色こころ秋のにしきなりけれ

深山紅葉

吉三

人とはぬみ山かくれのもみち葉は鹿のみひとり友ところみめ

谷紅葉

淡月

夕日さす谷のこのま一見渡せば紅葉のおくももみちなりけり

岡紅葉

守善

片岡のもみちみながら茶あけてつゑひく人のたゆるまもなし

湖邊紅葉

惠之

竹生しまろこに匂へるもみちははふねのゆらくも嵐なりけり

海邊紅葉

清澄

下葉よりもに初にけりあし火たくあまの苦やの軒のもみち葉

川邊紅葉

講師

季子

谷川のなかれにうひて薄くこくもみつるかへてうるはしき哉

渡紅葉

先達題者

陸夫

渡し場の舟まつひまにみてゆかん堤つゝさのはしのもみちと

○刀自のみまかられたるといたみてひとく

よりよせられたる歌とも

とところ我か松風會にいうしまれたる刀自の

むなしうなり給へるにいとかなしくて

翠松園のあるし陸夫

園のうちの百合はしほみて松風の千世の調へも甲斐なかり魁

挽歌

滋岡の従長

東山かたりし花のしたかけはゆめのなこりとなりけりかな

おなし園生にとしへ草つみたるゆり子刀自の

みまかり給ふときとて

山口の光子

しき島の道かたらひしろのむかしおもへは悲し姫ゆりのはな
ゆり子の君といたみまゐらせてよめるなかに

鈴木のとふね

木枯にふきさらされていと柳ほろりしすかためれのこりけり
ゆり子の君といたみまゐらせて

東條の花子

契りおまじことの葉くさもなつかしき君か形みと成にける哉
刀自のなくなり給ひしとききてかなしみのあまり

水野のひさの

親みも人よりふかき君なればとしきおもひもかきりなきかな
ゆり子刀自といたみて

世のなかにかくれ先たつといふことういとにくきわきなりけ
る我かおなじ園生にとしへ草つみさうひたるゆり子の刀自な
むこのふみつきの月もいさよふころかのみやこの桂とりてん
とてかじこのみやこにゆきたまへるより此うつし世にはまた
なき人となむなり給へりしろかなしともいとかなしとしとも
いととしう侍るや

たくひなくめてしきゆりのかれしよりさひしきまさる
ろのくうちかなとせの君も師の君もおほしなけきたまはぬわ
らはもいといたうなむ

明治三十あま四とせ十一月のはじめ 豊岡のつね子



おくろき

顧みれはいにし明治二十二三年のころなりけん三
河國岡崎の里にありしときおなしつかさ所にあり
しかみつ司の山口うしかねもころなるすゝめによ
りてなき妻と共にはしめてみくにふりにころき
し敷島の道にわけ入たりしかいくほとなく名古屋
の市にうつりてをり翠松園大人のをしへ子となり
そのをしへ草つみためむとて松風會員のむれに入
り年ころねもころなるみちひきによりてめをとか
たみにいそしみをいまはかけろふのあとなく消

はてことにもにうたひしことの葉草のかたみとなり
由たなるをかあしのきはみありけるさる中よもい
とうれしかりしは我が四日市松風會員の君達こと
はかりしておこそかなる追悼のむしろとりひらか
れていみしきははありし事なりけりかかりしかは
おなし松風會の友かきあるはうつし世にしとしか
りし方々よりあまとのみ歌とまはりたるそかとし
けあきてけの下にもきてそとれもひやられてなん
されはそのみ歌ともとまかきねあきいもかのこし
とる言の葉も聊つみそへて一卷をなしみ惠給はま

しかとくあるはうからやからにもわあちまゐら
せはと後のかとみにもなきはつまのおころにも叫
ふへあめれとてまろつの事を師の君におひまつま
てあくものしつ

由里花志ほみまのちもこのふみに

ははあるあをはのこしけるかあ

ひめ由里の花はしほみぬあのみを

のちの世まてのあともにはして

とうちあまきて情あるあたくにいやきおはあく
るものはあお花浦は花しほしみとる伴花政埤なま

明治三十五年七月九日印刷
明治三十五年七月十五日發行



非賣品

名古屋市下堅杉ノ町甲三十二番戸

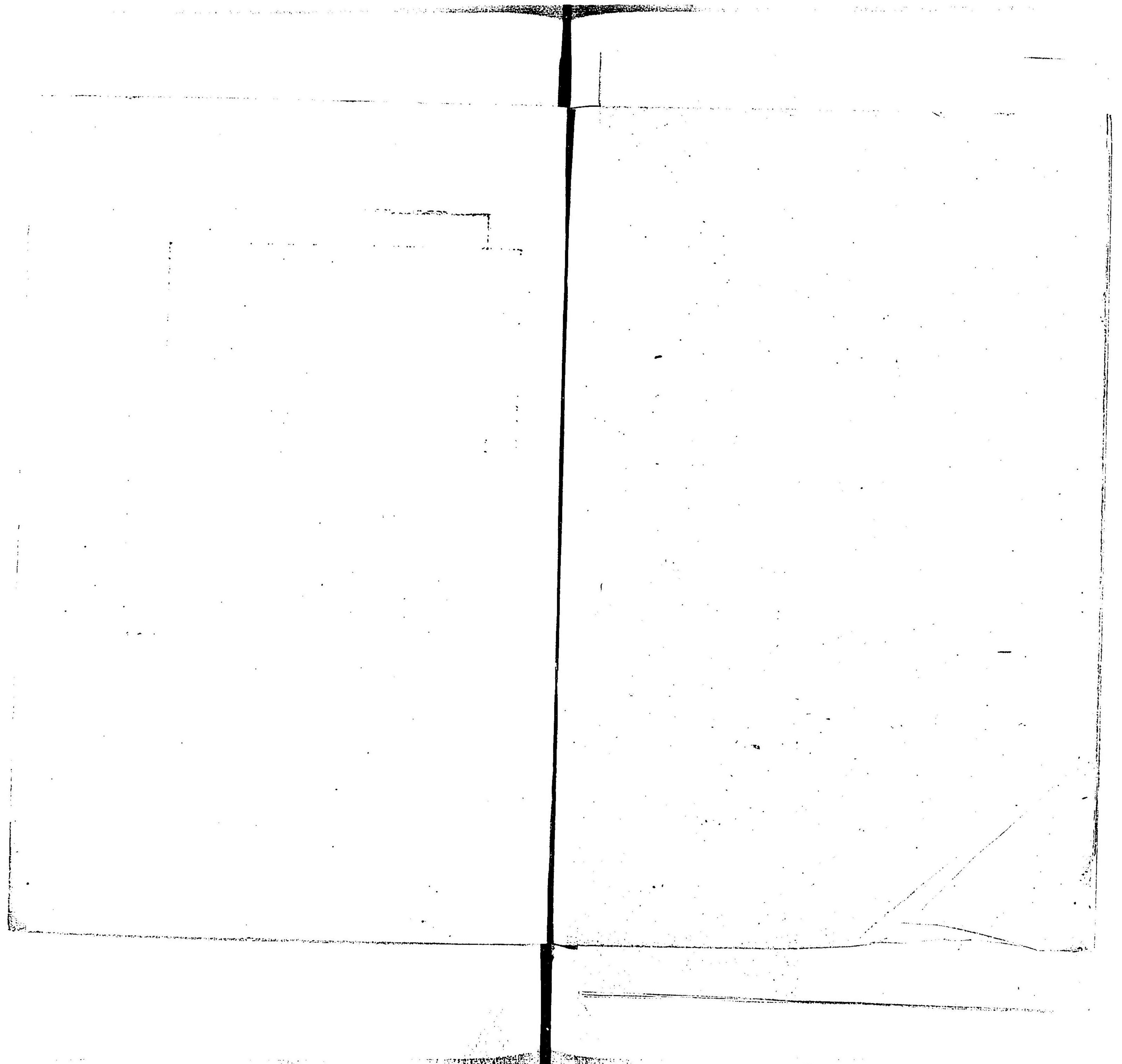
編輯者 林 陸 夫

四日市々南町四十一番屋敷

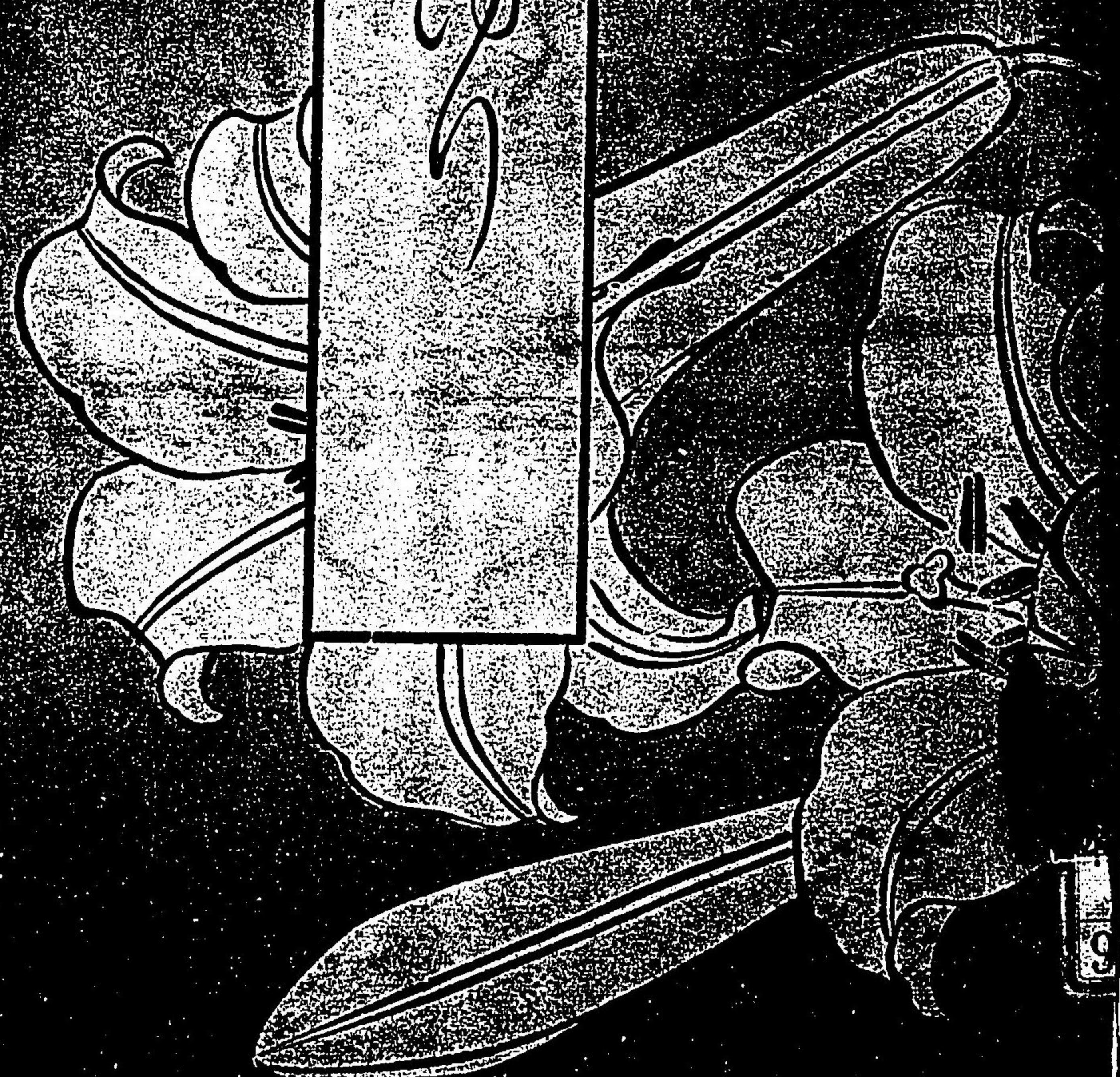
發行兼印刷者 伴 政 埤

名古屋市榮町十一番地

印刷所 扶桑新聞社



ひめゆり



086475-000-5

特22-981

ひめゆり

林 陸夫/編

M35

DBD-1322

